

ヨーロッパ諸語の最初の文法

—ゲルマン語・スラヴ語の場合—

de primis grammaticis linguarum germanicarum slavicarumque

下宮 忠雄

Tadao SHIMOMIYA

「最初」といっても程度の差があると思うが、ここでは Bullokar の英文法 (1586), Gueintz のドイツ語文法 (1641), Pontoppidan のデンマーク語文法 (1668), Lomonosov のロシア語文法 (1757) を中心に、文法体系の捉え方、品詞、格、テンスなど、二三の文法範疇について見ることにする。

〔第一次文献〕

- 1150頃 First Grammatical Treatise. Text and translation, pp.12-33, by Einar Haugen. London, Longman, 1972. [fyrsta málfraeðiritgerðin, phonology only]
- 1586 William Bullokar, Bref Grammar for English. London. (英語文献翻刻シリーズ 第1巻, pp.107-161, 原典本文 68pp. 大塚高信解説, 南雲堂 1971) [つまらない。綴り字が恐ろしく読みにくい]
- 1594 P. Gr., Grammatica Anglicana. Cambridge. (同上, pp.167-205, 原典本文 71pp. 渡部昇一解説) [このほうがずっと読みやすい]
- 1641 Christian Gueintz, Deutscher Sprachlehre Entwurf. Coethen. 125pp. (Documenta Linguistica. Hildesheim, Olms Verlag, 1978)
- 1660頃 Ludvig Kock, Introductio ad lingvam Danicam. Kopenhagen. pp.35-74. (Danske grammatikere fra midten af det 17 til midte af det 18 aarhundrede, udgivet af Henrik Bertelsen, Bd. I, Kopenhagen 1917)
- 1663 Peder Syv, Nogle betenkninger om det cimbriske sprog, pp.75-272 of above. [cimbrisk = tysk og nordisk]
- 1663 Justus Georg Schottel, Ausführliche Arbeit von der Teutschen Haupt Sprache. Braunschweig, Neudruck Hildesheim 1737. 1500pp. [発行地 Braunschweig は Jel-linek にもなく, G. A. Padley により知る]
- 1668 Erik Pontoppidan, Grammatica Danica, pp.1-426 (Bd. II of the item ca.1660).
- 1679 Jacobus Xaverius Ticinus, Principia linguae wendicae quam aliqui wandali-

- cam vocant. Praga. 78pp. Domowina-Verlag, Bautzen 1985.
- 1685 Peder Syv, Den danske sprog-kunst, pp.147-250 (Bd.III of the item ca.1660)
[sprog-kunst=grammatical]
- 1729 Manuel Larramendi, El imposible vencido. Arte de la lengua bascongada.
Salamanca. xxxiv+404pp. reprint San Sebastián ca.1980. [書名の征服されたる不可
能事とはジャングルのように複雑な動詞のテンスと人称変化が解明されたことを指す]
- 1730 Ivan Seměnovič Gorlickij, Grammaire françoise et russe en langue moderne.
St.Pétersbourg. 64pp. [村山 1971]
- 1751 James Harris, Hermes, or a Philosophical Inquiry concerning Language and
Universal Grammar. London (cf.item 1586, 第12巻, 原典 426pp. 中島文雄解説, 1971)
[非常に面白い, 少なくとも, Port-Royalよりは。特にテンスに関して]
- 1755 Mihail Vasil' evič Lomonosov, Rossijskaja Grammatika. St.Peterburg (=Polnoe
sobranie sočinenij, t.1-11, Moskva 1950-83, t.7 Trudy po filologii pp.389-578)
- 1782 Johann Christoph Adelung, Umständliches Lehrgebäude der Deutschen Sprache
zur Erlernung für Schulen. 2Bde. 1784pp. reprint Hildesheim 1971. [Lehrgebäude
=System; J.Grimm 以前の最高峰]
〔第二次文献〕
- Jellinek, Max Hermann, Geschichte der neuhochdeutschen Grammatik von den Anfän-
gen bis auf J.C.Adelung. 2Bde. Heidelberg 1913-1914.
- Padley, G.A., Grammatical Theory in western Europe 1500-1700. Trends in vernacu-
lar grammar. I.Cambridge 1985, II.1988.
- Drei russische Grammatiken des 18. Jahrhunderts, mit einer Einleitung von B.O.Un-
begaun. Wilhelm Fink, München 1969 (Slavische Propyläen, Bd.55).
- 村山七郎「ロモノーソフ以前の二つのロシア文法」九州大学文学部言語学研究室。1971
(66部印刷, 非売品)。
- 山口巖「ロシア中世文法史」名古屋大学出版会 1991.

以下、出版年順に若干の考察を加えるが、近世初期における文法書に共通して見られる
顕著な特徴は、文法を4つの部門に分けて、Orthographia (音論), Prosodia (音節、音
量、アクセント), Etymologia (=Wortlehre 語論、すなわち形態論および語形成),
Syntaxis (格、一致、語順など)としていることである。また、言語一般に考察を加えて
いるものも多く、その場合には、必ずと言ってよいほど、ヘブライ語がすべての言語の母
であり、ラテン語とかドイツ語はその成れの果てとしていることである。ヘブライ語が祖

語とは言えないという考えにいたるには 1782 Adelung まで待たねばならない。

1150頃とされる『第一文法論文』は、書名も著者名もなく、後の文法家たちが、第二論文、第三論文などとして引用していることから、第一論文と名付けられたもので、音論しか扱われていないのが残念だが、母音 $a > e$, $i > y$ (i-Umlaut), $a > o$, $e > \phi$ (u-Umlaut) の文字法の必要を説くなど、機能的音声学としての音韻論の先駆であると、Haugenその他の学者が指摘している。

Etymologiaにおける分類の基礎は 8 品詞、すなわち, Nomen, Pronomen, Verbum, Participium, Adverbium, Praepositio, Coniunctio, Interiectio である。このうち, Participiumについては、1782 Adelungが「ほとんどの文法家は独立の品詞としているが、これは動詞から派生した副詞であるから、そうするに値しない」と述べている。また, Interiectio をギリシア人は Adverbiumに入れていたが、ラテン語では articulusがないために、代わりに間投詞を設けて、合計 8 品詞としたのである。

Nomen の accidentia として genus, numerus, casus, declinatio, comparatio, figura, species があげられている。accidentiaは、今日の文法範疇 (grammatical categories) に当たる。Verbumの accidentia として genus, tempus, modus, persona, numerus, coniugatio, figura, speciesがあげられる。accidentia は屈折と語形成を含む (Flexion und Wortbildung)。Accidence は20世紀になってからは G. O. Curmeを除けば、一般にもはや使われない。figuraと speciesも今日は使われないが、ともに語形成の 2 区分で、figuraは simplex (grand; dō)と composita (grand-père; vendō)を、speciesは primitiva (grand; mors)と derivata (grandeur; mortālis)を含む。ギリシア語の例をあげれば、speciesの primitivaは híppos 馬, polemós 戦い, その derivata は hippeúō馬に乗る, poleméō 戦う, である。

1586 Bullokar においては、品詞は noun, pronoun, verb (以上 declined), participle, adverb, conjunction, preposition, interjection (以上 undeclined)となっている。nounの中に noun-substantive, noun-adjective を含ませているのはラテン文法以来の伝統である。格は Nominative, Accusative, Gainative, Vocative, Genitiveの 5 つとし、Dativeの代わりに Gainative (獲得格) という妙な名称を用いている。動詞の分類は verb-active (他動詞), verb-substantive ("be"), verb-neuter (自動詞), verb-possessive ("have"), verb-neuter-imperfect (助動詞) としている。時制は Present, Preter (Preter, Preter-perfect, Preter-pluperfectを含む), Future である。

1594 P. Gr. 著者はこの略字でしか知られないが、中味は Bullokar よりもずっと読みやすい。本文 (Grammatica Anglicana) は i. de etymologia (形態論), ii. de syntaxi の 2 部に分かれ、Dictionariolum (anglo-latinum), Analysis Grammatica, Vocabula Chauceriana を含む。動詞については simplex anomalia (sit, sate; make, made; take,

took), duplex anomalia (get, gate-got; drink, drank-dronk)のように、過去が1形のみのも、過去に2形あるものに分け、過去分詞を変化表に入れていない (get の過去形 gateのアプラウトはゴート語等を思い出させる)。強変化動詞の分類などはない (デンマーク語にはあり)。過去時制は praeteritum (I hated), secundum praeteritum (I have hated), tertium praeteritum (I had hated) の3者である。

1641 Gueintzの「ドイツ語文法草案」は第1部 (Das Erste Buch) 音論・形態論および第2部 (Das Zweite Buch. Von der Wortfügung すなわち統辞論) よりなる。ドイツ語の起源については、大部分の単語がヘブライ語から来ている、などとしている。文字 (Buchstaben) は selbstlautende (母音) と mitlautende (子音) に分けている。語形成 (第4章 Wortforschung) については、単語を urspringliche と entspringliche (今のドイツ語では einfache と abgeleitete) に分ける。前者の例は Mensch, Liebe (ともにヘブライ語 Enosch 人間, Leb 心, から来ているとしている), 後者の例は menschlich, lieblich である。変化語 (wandelbar) は Zeit のあるものとなないものに分けられ, Zeit のないものは Nenwort と Vornenwort に分けられる。文法性について, das weib が中性である理由は, 女性はほとんど ungeheuer だし, Aristoteles がそう呼んでいるから、などと述べている。格 (casus, fal) は, ラテン語と同じく6個, Nen-endung (名格), Geschlechts-endung (族格、属格), Geb-endung (与格), Klag-endung (訴え格, casus accusativus を訳したもの; ラテン語はギリシア語 ptôsis aitiatiké を誤訳したもの), Ruf-endung (呼ぶ格), Nem-endung (奪う格=Ablativ) をあげている。動詞の活用類 (Verwendung) としては4種をあげ, I. ich liebe, liebete, habe geliebet, hatte geliebet, II. ich sehe, ich sahe, III. ich beisse, ich biss, IV. ich schelte, ich schalt としている。過去時制に, fastvergangene (=imparfait), vergangene (=passé composé), längstvergangene (=plus-que-parfait) の3つをあげている。受動態 (passiva) を die leidenschaftliche verenderung と表現している。現在完了 ich bin gewest の過去分詞はオランダ語のそれを思い出させる。分詞 (第17章 Vom Mittelworte) として liebender, geliebter をあげている。最後に (pp. 122-125) ラテン語・ドイツ語の術語89項目の対訳 (Technica, Kunstwörter) を掲げている (本稿末尾のコピー図を参照)。

1660頃 Kock. ラテン語で書かれた40頁ほどのデンマーク語文法であるが、簡潔で読みやすい。今日の dansk はヘブライ・ギリシア・ラテン・ガリア (=フランス)・英語・ドイツ語から来ており、ヘブライ語起源が最も多い、として amme, beck, boed ('domus'), dum, dyyd, eed, gave, gaaren, horn, maal, mitten, om, oe, øjen, skade, skaebne, suppe などあげているが、これらの大部分は立派なゲルマン語ないし印欧語起源といえる。かわったところでは, praepositiones を separabiles と inseparabiles に分けて, 前者に ad, af, an, bi, hos, i, iblant..., 後者に be, mis, sam, u, van, vel, veder,

und のような接頭辞をあげている（起源的には両方とも副詞なのだが）。

1663 Peder Syv はデンマーク語で書かれた最初のものである。1685 Syvと異なり、言語一般についての考察が詳しい。「始めに1人の人間 Adam がいた。そして1つの言語、1つの方言、Adam語または hebraisk があった。しかし、1人の人間からすべての人間が来たように、1言語から他のすべての言語も来た。われわれはすべて1つの言語であるヘブライ語を話すのだが、それは変化した (forandret)ヘブライ語なのである」(p.87)と述べている。4つの主要なヨーロッパ語は a. latinsk (vaelsk=italiensk, spansk, fransk), b. slavisk (russisk), c. kroatisk, bemisk, polsk, d. cimbrisk (dansk, svensk, norsk, tysk)であるとしている。[今日, b. c. はともに slaviskである。] det cimbriske sprog は Babelに由来する最古の言語の1つであるとしている (p.92)。1562年の Busbek によるクリミア半島のゴート語を tysk-cimbriskと呼び, broe, tag, oeghene, handa, waghene (=brød, dag, øjene, haand, vogn)をあげている (p.97)。parthisk または persiskは graesk と tysk によく似ているとして, dactira, garda, dandan, choda, sune (=dotter, gaard, tand, gud, son)をあげている (p.99) が、これらは正しい。アラビア語には sverd (剣)をあらわす単語が1000, løve (ライオン)をあらわす単語が500, slange (蛇)をあらわす単語が200もあると述べている (p.109)。外来語 serpentiner, vaillant, travellere, assistens の代わりに gode danske ordを用いて feldtslanger(野の蛇), mandhaftig (男らしい), arbejde(働く), hjælp, bistand (助力)を用いることができると言っている (p.147)。cimbriskから伝播した単語としてフランス語の bourg, danse, place (<borg, dands, plads), イタリア語の dansare (<dandse), ricco (<riig), strada(<straede)などがあげられている (p.262)。これらのうち, bourg, riccoは正しいが, danse, place, stradaは、借用の方向が逆である。ゴート人・キンブリア人がイタリア支配中にラテン語に持ち込んだ単語として burgum (burg, slot), cattus (kat), guerra (verie, gevaer, motstand)をあげている (p.263)。このうち, cattusは誤りだが、他は正しい。

1663 Schottel は残念ながら、今回は利用できなかった。彼は Singular, Kasus, Genus, Substantiv の代わりに Einzahl, Fall, Geschlecht, Hauptwort を普及させ、また E. Coseriu によると、記号の恣意性に言及しているという (E. コセリウ、下宮忠雄訳『一般言語学入門』三修社 1979, p.15)。

1668 Pontoppidanのデンマーク語文法はラテン語で書かれた 426頁の大部のもので、observationes orthographicae pp.31-87, observationes etymologicae pp.89-278, observationes syntacticae pp.279-371, の3部に分かれる。注目すべきは cognatio litterarum(文字の同源性, pp.76-87)の項において、Grimm の法則とは別の意味で、ドイツ語 burg, デンマーク語 borg とギリシア語 púrgos "turris"; ドイツ語 tapfer, dapffer

サクソン語 *tapper*, デンマーク語 *dapper* とポーランド語 *dobry* 「善良な」; ドイツ語・デンマーク語 *horn*, *hals*, *haupt*, デ *hovet* とラテン語 *cornu*, *collum*, *caput* が同源であることを、すでに正しく見抜いていることである。lang, laenger, laengst; mand, maend; faar, fik; gaar, gik; tager, tog のような Umlaut, Ablaut の現象も *cognatio literarum* と呼んでいる。冠詞を *articulus praepositivus* (*indefinitus: en mand, et huus; finitus/emphaticus: den mand, det huus*) と *articulus postpositivus* (*seu subjunctivus: manden, dyret*) に分けている。p. 307 *syntaxis pronominum* の項では、デンマーク語 *Gud hand hjælper alde sine* (神、彼は自分の身内のすべてを助ける) における代名詞 *hand* (= *han*) の繰り返しはガリア人 (フランス人) が *Ton Père est-il à la maison?* (君の父、彼は家にいるか) と同じだと述べている。巻末 pp. 373-378 *syllabos* はラテン語・デンマーク語の文法用語対訳になっている (*grammatica* = *sprogkonst*, *orthographia* = *skrive-riktighed*, *etymologia* = *oerdgrandskning*, *oerdforskning* など)。また、当時としては、まだめずらしく、引用文著者索引 (*catalogus auctorum*, pp. 379-383), 事項・語彙索引 (*index rerum et vocum quarundam notabilium*, pp. 384-420) がついている。

1679 *Ticinus* のヴェンド語 (= 高ソルブ語) 文法は、カトリック教が正しいことを広く普及させるために書かれたもので、78頁の小型冊子である。Frido Michatík の序文を付けている。著者 *Ticinus* (1656-1693) は *Neisse*, *Prag* で教師をしていたが、対トルコ戦の *Prinz Eugen* 軍の副牧師を勤めている時に死んだ。内容はつまらないが、スラヴ語の文法としては、ロシア語のそれよりも早い。冠詞はないはずだが、*ton/ta/te* を引き当てている。格変化の例として *Nom. dom* (家), *Gen. domu*, *Dat. domej/domu*, *Acc. dom*, *Voc. o domjo*, *Instr. z domom* をあげておこう。

1685 *Syv* は 1663 *Syv* と異なり、品詞別に形態論と統辞論を扱ったものである。冠詞を *skel-ord* (区別語) と呼んでいる。*hus-et*, *et hus*, *det hus* など。ラテン人は *skel-ord* を用いないが、ギリシア人・ヨーロッパ人は用いると述べている。品詞は *skel-ord*, *navn-ord*, *fornavn-ord*, *tid-ord*, *bi- eller hos-ord*, *bevege-ord*, *føj-ord* = *articulus*, *nomen*, *pronomem*, *verbum*, *adverbium*, *interjectio*, *praepositio*, *conjunctio* である。第1部は品詞解説、第2部は語の組み合わせ (*ordføjelse* = 統辞論) となっている。

1729 *Larramendi*. バスク語最初の文法書である。これによって複雑極まる動詞の変化の全貌が始めて解明された。*Larramendi* はバスク語辞典 (スペイン・ラテン語対訳) の初めての著者でもあり、その発行地 *Salamanca* (1218年創立、スペイン最古の大学) は、その後、バスク語研究のメッカとなった (1951-56年, *Antonio Tovar* が学長時代にバスク語の講座が設けられ、バスク人 *Luis Michelena* が後に印欧言語学教授としてバスク語も教えた)。 *Larramendi* のバスク語文法は第1部 *declinaciones del nombre*, *pronombre*,

conjugaciones absolutas, transitivas del verbo activo, y neutro, del verbo pasivo, y de otros varios verbos determinables e irregulares (1-256), 第2部 syntaxis, o construcción con todos sus constitutivos (257-335), 第3部 prosodia = acentos, modos de pronunciar del bascuense (336-395), índice (396-404)となっている。格変化は nom. gen. dat. ac. voc. abl. の6格であるが, nominativoには Jaun-á, Jaun-ác "el señor" の2形あり、前者は自動詞、後者は他動詞の主語に用いられる: Jaun-á dátor 主人が来る, Jaun-ác eman-dit 主人が私にそれをくれた。後に Hugo Schuchardt や Adolf Dirr らによって有名になる Ergativ (能格) 現象にはまだ特別な関心が払われず、バスク語の存在を世界的に知らしめた Wilhelm von Humboldt さえも、これには特に注意を向けなかった。動詞の時制として直説法の独立形 (conjugación primera absoluta) のみをあげる: 1. presente (jaten det 'lo como'), 2. pret. imperf. (jaten nuen 'lo comía'), 3. pret. perf. próximo (jan det 'lo he comido'), 4. pret. remoto (jan nuen 'lo comí'), 5. pluscuamperf. (jan-izan nuen 'lo avía comido'), 6. fut. impf. (jango det 'lo comeré'), 7. fut. perf. (jan-izango det 'lo avré comido') の7個である。

1730 Gorlickij (ゴルリツキー) は学術的・網羅的なものではなく、会話のための手引きである。動詞の変化のところで、フランス語の興味深い間違いを指摘しておこう。動詞の模範は lire = čitat' (読む) である。現在はよいのだが、過去のところで, j'ai lu, tu as lu, il a lu = ja čitalŭ, ty čitalŭ, on čitalŭ (まではよい), j'ai lue, tu as lue, elle a lue = ja čitala, ty čitala, ona čitala... と、ロシア語の女性形に合わせてフランス語の過去分詞も女性形にしてしまっている。ロシア語動詞未来形 budu čitat', budeš' čitat', budetŭ čitat'... にフランス語 je veux lire, tu veux lire, il veut lire... を引き当てている。過去能動分詞 čitavŭ, čitavšij, čitaščaja, čitavšee = après avoir lu としているが、より正しくは ayant lu であろう。

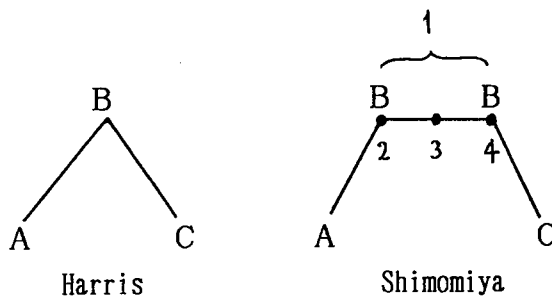
1751 Harris の一般文法は、今日の用語でいえば、深層構造、個別文法は表層構造ということになろう。第1部, 第7章 Concerning Time and Tenseは、とりわけ逸品である。Tense を3個の Indefinite tenses (without reference to any beginning, middle, or end) および, 9個の Definite tenses (with reference to such distinctions) に分けている。不定 (indefinite) 時制は 1.-3., 定 (definite) 時制は 4.-12. である。

1. Aorist of the present : gráphō, scrībō, I write
2. Aorist of the past : égrapsa, scrīpsī, I wrote
3. Aorist of the future : grápsō, scrībam, I shall write
4. Inceptive present : méllō gráphein, scrīptŭrus sum, I am going to write
5. Middle or extended present : tugkhánō gráphein, scrībō or scrībēns sum, I am
6. Completive present : gégrapha, scrīpsī, I have written |writing

7. Inceptive past : émellon gráphein, scrīptūrus eram, I was beginning to write
8. Middle or extended past : égraphon or etúgkhanon gráphōn, scrībēbam, I was
9. Completive past : egegráphein, scrīpseram, I had done writing └writing
10. Inceptive future : mellésō gráphein, scrīptūrus erō, I shall be beginning to write
11. Middle or extended future : ésomai gráphōn, scrībēns erō, I shall be writing
12. Completive future : ésomai gegraphós, scrīpserō, I shall have done writing.

Aorist of the present の例としてあげられている下記の walk は過去・現在・未来に通用する panchronique なものである。Millions of spiritual creatures walk the earth./Unseen, both when we wake, and when we sleep. Milton, Paradise Lost, iv. 277 われわれが眼を覚ましている時も、眠っている時も、たとえわれわれの眼にはふれなくとも、幾百万の天使たちがこの地上を歩きまわっている。(平井正穂訳)

Harrisは Time を A, B, C の3角形で示し、線分AB=Past, 点 B=Now, Instant, 線分BC=Futureとしている(下記左図)。私は点 Bを拡張して1, 2, 3, 4とし、下記右図のように Tense を配置したい。



1. I write (aorist, indefinite)
2. I am going to write (inceptive).
3. I am writing (middle)
4. I have written (completive)

1755 Lomonosov (ロモノーソフ, 1711-1765)のロシア語文法はロシア語で書かれた最初の科学的なロシア語文法である。彼は自然諸科学の基礎を築き、またロシア史の著者であり、詩人であった。漁師の息子として生まれ、1731年にモスクワに出て1736年ギムナジウムを卒業、ペテルブルクのアカデミーからの派遣でドイツに留学, Marburg 大学で化学と冶金学を研究し、帰国後1745年ペテルブルクの科学アカデミーで化学教授になった。『ロシア語文法』は著作全集11巻のうちの第7巻「文献学論集」1739-1758 の中のpp. 389-578

を占める。ドイツ語訳 (Russische Grammatik, aus dem Russischen übersetzt von Johann Lorentz Stavenhagen, St. Petersburg 1764) が出ているほどの名著である。第1章 (人間の言葉)、第2章 (字母・発音)、第3章 (名詞)、第4章 (動詞)、第5章 (補助的・奉仕的品詞=代名詞、形動詞、副詞、前置詞、接続詞、間投詞)、第6章 (syntax) から成る。注目すべき点を1つだけあげておく。動詞の時制 (vremena glagola, § 268, p. 480) は10個あるとしている (名称は英語に直訳して示す): 1. present (trjasu) shake; 2. past indefinite (trjas) shook; 3. past once (trjaxnul) shook once; 4. long-ago past first (trjaxival) used to be shaking; 5. long-ago past second (byvalo trjas) used to shake; 6. long-ago past third (byvalo trjasyval) used to shake several times; 7. future indefinite (budu trjasti) will shake; 8. future once (trjaxnu) will shake once; 9. past perfect (napisal) wrote; 10. future perfect (napišu) will write. 今日、ロシア語動詞形態論の根底となっているアスペクトの概念をまだ明確につかんでいないことが察せられる。同じ巻の p. 694に「ロシア語文法資料」の中で、動詞の用法として、ドイツ語と対照して、ich gab manch mahl [ja daval mnogo raz 私は何度も与えた]; ich pflegte zu geben [ja obyknovenno daval 私は与えるのがならわしだった]; ich wollte ihm geben [ja xotel jemu dat' 私は彼に与えたかった] をあげておりアスペクトの差には十分に気付いている。このうち、前2者は不完了体 (imperfective aspect), 3番目が完了体 (perfective aspect) である。また NB として pobit' (打つ) が perfectum (soveršennyj), pobivat' がその frequentativum (učaščatel'nyj) であるという用語も見られる。資料篇 p. 867に「ドイツ人、フランス人は増大辞 (Vergrößerungswörter) をもたないので、ロシア語 dvorina, dvorišče はドイツ語では ein grosses Haus, ein Ungeheuer von einem Haus と表現せねばならない」と述べている。ロモノーソフはドイツを旅行中に、ドイツの文化や言語が地方によって異なっているにもかかわらずそれらの地方に通用する統一した文章語が存在していることに気付いた。彼がロシア文法を書こうと思いついたのは、このような背景によるものであった (山口 p. 126)。

1782 Adelung (1732-1806) は「最初の」の範疇に入れるには遅すぎるが、言語学史上有名な Mithridates oder allgemeine Sprachenkunde (4 Theile, Berlin 1806-1817) の著者であり、画期的な Jacob Grimm : Deutsche Grammatik (4 Bde., 1819-1837) 以前の代表的なドイツ文法であるので、ごく簡単に触れておきたい。ヘブライ語は最古の言語であるが、祖語 (ursprüngliche Sprache) ではない (p. 10) として、ヘブライ語神聖視からようやく開放され始めている。スキュタイ語とケルト語が、ヨーロッパの2つの主要言語群 (Hauptsprachgruppen) であり、ラテン語は Ligurisch, Pelasgisch, Hellenisch, Trojanisch, Etruskisch の混合により生じた、としている (p. 11)。Orthographie (=Rechtschreibung 正書法) と並んで Orthologie (または -epie=Rechtsprechung 正話法) と

いう用語を用いている。Adelung は die Syntax でなく、der Syntax (男性形) と言っている。Syntax=die Lehre vom Gebrauch der Wortformen であるが、これは後の K. Brugmannの見解でもあった。

【まとめ】「ヨーロッパ語最初の文法」のようなテーマの場合、材料は同じでも出来上りは料理人によっていかようにも調理されえよう。近世から現代にいたる文法の記述の配列は、音→形態→統辞 (Phonologie→Morphologie →Syntax) で、言語的単位の小さなものから大きなものへ、という順序は、大筋において変わっていない。形態論も、名詞、形容詞、代名詞、動詞... から不変化詞に進み、最後に語形成が来る。近世においては、形態論を Etymologia と呼び、語形成は各品詞の中に組み込まれていた。概して規範文法的であり、方言や逸脱形をも記述するようになるのは、19世紀になってからである (ドイツの場合、Jacob Grimm)。また、accidentiaは今日の grammatical categories に相当する。2次文献の3番目にあげた『18世紀の3つのロシア語文法』は1992年5月16日の岩手大学での発表終了後に到着したもので、上に扱わなかったが、これは1706, 1731, 1750年のものである。1706年のものは単語・会話集, 1731年のものは V. E. Adodurov と推定される匿名の Anfangs-Gründe der russischen Sprache (48pp.), 1750年のものはスウェーデン語で書かれた Michael Groening: Rossijskaja grammatika. —Thet år Grammatica Russica eller Grundelig Handedning til Ryska Språket. Stockholm (308pp.) である。Groeningのロシア語文法の中から、テンスを取り上げると、これに praesens, imperfectum, perfectum, futurumの4つがあり、plusquamperfectum は特別な形がないので副詞 davno (ずっと以前に) などを添える、としている。用例: praesens (ljublju)私は愛している imperfectum 完全に過ぎ去っていない事柄を示す (ja ljubivalü) 私は愛していた; perfectum 完全に過ぎ去った事柄を示す (ja ljubilü) 私は愛した; futurum 起こるだろうことを示す (napišu) 私は書くだろう。

【résumé】 Sur quelques premières grammaires des langues européennes.

Conformément au colloque du sujet commun, on a tenté d'analyser les premières grammaires de l'anglais, de l'allemand, du danois, du basque et du russe. La grammaire contenait quatre parties: orthographia, prosodia, etymologia (=morphologie) et syntaxis. L'ordre de la description des faits grammaticaux est essentiellement le même dès les temps modernes jusqu'à nos jours (des plus petites unités linguistiques aux plus grandes unités, c'est-à-dire, le son, la forme [le mot] et la phrase, i.e. phonologie, morphologie, syntaxe). Aussi, l'ordre des parties du discours commence par le nom et finit par les non-flexionnels. Quant à la théorie du langage, on avait cru jusqu'au 18e siècle que l'hébreu fût la

langue la plus vieille, que ce fût la mère de toutes les langues du monde, que les langues modernes de l'Europe soient des hébreux transformés. On vient d'apprendre une chose étonnante que le grammairien danois, Erik Pontoppidan (1668), aie déjà aperçu correctement les correspondances étymologiques de l'allemand burg et du grec pürgos "turris", de l'allemand tapfer et du polonais dobry, et les phénomènes de Umlaut et Ablaut sous le terme "cognatio literarum", 150 ans avant Rasmus Rask ou Jacob Grimm.

122.	Kunstwörter.
Technica,	Sprachlehre.
Grammatica,	Dienstfertigkeit.
Habitus Instrumentalis,	
Essentialia,	Wesentliche.
Accidentalia,	Zufällige.
Germanismus,	Die Deuschheit oder Deutsche Sprache.
Radices,	Ursprungswörter.
Arculus,	Ein Geschlechtswort.
Orthographia,	Wortschreibung.
Profodia,	Wortsprechung.
Absolute,	Ohngegenblicklich.
Relativum,	Gegenblicklich.
Vocales,	Selblautende.
Consonantes,	Mitlautende.
Diphthongi,	Doppellautende.
Derivativum,	Entspringlich.
Primitivum,	Urspringlich.
Mutæ,	Nichtlautende.
Semivocales,	Halblautende.
Spirantes,	Hauchende.
Mutatio,	Verwandlung.
Nomen,	Verwechslung.
Substantivum,	Nennwort.
Adjectivum,	Selbstendig.
Proprium,	Bestendig.
Singularis numerus	Eigen.
Pluralis,	Einsige/ einzelne zahl.
	Ubereinsige/mehrere zahl.
	Wort.

123.	Kunstwörter.
Technica,	Wortforschung.
Etymologia,	Art.
Species,	Gestalt.
Forma,	Untheilbar.
Simplex,	Theilbar.
Composita,	Wandelbar.
Declinabile,	Unwandelbar.
Indeclinabile,	Vermindert.
Diminutivum,	Benamt.
Denominativum,	Herrührend.
Derivativum,	Zahlwort.
Númerale,	Abtheilig zahlnenwort.
Distributivum,	Vielfeltig zahlnenwort.
Multiplicativum,	Vorelter nenwort.
Patronymicum,	Völker nenwort.
Gentile,	Zeit nenwort.
Verbale,	Das Geschlecht.
Genus,	Männliches.
Masculinum,	Weibliches.
Fœmininum,	Unbenanntes.
Neutrum,	Zweyerley.
Commune,	Allerley.
Omne,	Ein sal ist unverstend-
Casus,	lich/ und kan man es eine en-
	dung nennen/ dan am ende
	es verendert wird / und des.
	wegen bey den Hebræern und
	Frangosen keine Casus, weil
	nichts verendert wird/ doch
	kan man auch sal sagen.
Abso.	Vor

Christian Gueintz, Deutscher Sprachlehre Entwurf.
Coethen 1641. 125pp. (reprint, Hildesheim 1978)